

渡辺 誠——建築家、アーキテクト

ソオフィス代表、横浜国立大学大

学院講師。

1952年横浜市生まれ。76年横

浜国立大学大学院修了。同年大高

建築設計事務所、79年磯崎新アト

リエ入所。84年アーキテクツオフ

イス設立。主な作品に青山製園專

門学校1号館、村のテラス——坂

内村・森呼吸、ATLAS、Kミ

ュージアムなど。

都市は、たくさんの人やモノの活動が重なりあった「複雑系」である。

Kミュージアム。正式には共同溝展示館（H'8年10月完成、一般公開はH'9年春）といふんですが、共同溝——つまり電気やガス、水、そして光ファイバーなどといった災害のたびに我々がよく耳にするあのライフライン、人間の生活を支える生命線——それを入れた巨大な構造体が都市の地下には埋まっているわけですが、Kミュージアムは、そうした都市のインフラストラクチャーを理解してもらおうという目的でつくられた施設なんです。都市機能自体を展示するご承知のとおり周りには何も無い、荒野みたいな所にぱっと建つているわけですが、中身は都市そのもの。インフラストラクチャーという都市自体の方向性やイメージだけはキャンセルできない。いくら軽くしても建築して建つという性格は変えられない。でもの中には、その重力さえもキャンセルしたいという意識がある。簡単に言えば、モノは浮かせたい。止まつたままで出来っこないし、仮に動いたら、それは車になっ

一步一歩の理論の積み重ねの先には、溝が待つていて。それを超えるのは、飛躍しかない。

基本的には、建築を建築的にしているさまざまな拘束を解きたい

んですよ。たとえば、その最大なものは重力。地球上で何かをつくる場合、重力だけはキャンセルできない。いくら軽くしても建築して建つという性格は変えられない。でもの中には、その重力さえもキャンセルしたいという意識がある。もちろん建築を浮かせるなんて出来っこないし、仮に動いたら、それは車になっ



Kミュージアム／臨海副都心共同溝展示館 東京有明'96

自然も歴史もなにも無い荒野のような臨海部に出現する強力なパワー。応答すべき環境をもたない場所には、建築の方から働きかけていくという考え方があらわれている。ちなみに内部の展示設計は渡辺氏によるものであるが、そこに展示する共同溝模型の制作及び展示施工は日精・展示造形本部が担当しており、市民生活にとって重要なライフルラインの概要を地下空間の多目的利用・都市景観・防災上の観点と共にその模型と映像等を使いわかりやすく説明している。

[FRONT LINE]
インタビュー／人・車・都市、そして文化
渡辺 誠 （建築家）
Makoto Sei Watanabe

若者のトレンドスポットとして賑わう臨海副都心に

都市 との 応答

この秋、宇宙船とも見間違うような奇妙に美しい不思議な構造物が出現。
訪れる人々の関心を集めている。設計したのは渡辺 誠氏。
これからの時代を代表する人気建築家の一人である。

地ですから、臨海とは状況が大きく違う。今ある街並みにどう応えるかが問われます。ならば、いろんな家がたまたまと集まつたみたいな、そういうマンションをつくりたいと思ったわけです。どの部屋も似たような四角い箱ではなく、1軒1軒の家が全部違う顔をしたマンション。広場もあって、入口も何カ所かあって好きなように選べる。つまり選択できることが都

市であるなら、どこを取り出して

ジが束になって、そこに集積されている。つまり都市とは、いろんな人が集まり、いろんなふうに自由にやっているんだけれど、たくさんの異なるものが重なり合うことによって金体としては都市を形づくる、一種の複合システムではないかと。だからKミュージアムでも、どこかそんなイメージを表現してみたいと思った。

一方、都市がテーマという意味では、この夏に完成したATLAS（アトラス）も同じです。民間が販売した分譲マンションなんですが、「すでに出来上がっている都市の中にはめ込まれる建築はどうあるべきか」がテーマでした。でも、テーマは確かに同じなんですが、こちらはなにしろ周りは小さな建物の密集する一種住専の立

合住宅があつていいはずだと。KミュージアムとATLASはどうやらテーマは都市でしたが、条件が違つた。まず場所が、片方は住んだり、いつもいるような所ではなく、もう片方はまったくその逆だった。したがって、課題が違つたから、結果も全然違うものとなつた。どちらも「都市とは何か」を考えた上で私の解答だったことに変わりないのですが。



●渡辺誠氏の著書をプレゼントいたします。P5をご参照ください。

「建築はその地の環境の潜在力を引き出して形にしたもの」を自らの基本姿勢とし、氏ならではの探求心と類稀な創造力で、あらゆるフィールドに果敢に挑む。現在、西暦2000年に完成予定の都営地下鉄・飯田橋駅の設計を手掛けた一方、5年前から取り組み始めたマルチメディア時代の都市・建築計画ともいいうべき「誘導都市プロジェクト」を推進している。

CONTENTS

P1 FRONT LINE

●[インタビュー]人・車・都市、そして文化
渡辺 誠——都市との応答

P6 FROM OUTSIDE

もうすぐやってくる?
CALS時代の基礎知識

P7 VISION

定期借地権と都市空間開発

P9 NEW LINEUP

●立体駐車設備●
C Sパーキング・ターンテーブル内蔵型
E Pパーキング・中間乗入式ターンテーブル内蔵型

P11 ARRANGEMENT

●立体駐車設備／導入事例●
りんくうゲートタワービル
横浜トヨペット ウエインズビル

P13 TREND

現場の「いま」が、今すぐ見れるパソコン会議システム

P14 ANOTHER PROJECT

●他事業紹介／物資本部物資部●
サンストップ合せガラス ソーラーチェック

制作協力 株式会社 東京ネットワーク・ピューロー

A D PAPAS FACTORY

印 刷 三美印刷株式会社

PHOTOGRAPH PPS通信社（表紙）／松岡茂樹（P1～P5）

アーキテクツオフィス（P2～P4）

株式会社スタジオ・エス（P12）

株式会社新写真工房（P12）

NTTマルチメディアビジネス開発部（P14）

NTTファシリティーズ（P14）

いんだろうかと思ひますね。それに地下の自走式駐車場つてあまりいいイメージがないでしょ。映画に出てくるのも、犯罪のシーンが多いですよね（笑）。ならば、そういうことをイメージさせないような気持ちのいい駐車場づくり、そういう発想もあっていいんじやないかと。また、先程の新規開発もそうですが、たとえば駐車設備メーカーと建築家が一緒に取り組んで新しい駐車設備を共同でつくるという場面だつてあり得るでしょ。



FROM OUTSIDE



もうすぐやってくる? **CALS時代の 基礎知識**

松永 晃
ゲイトーク代表

ディトーク代表

タル・ネットワーク社会というと、インターネットのネットサーフィンなどエンターテイメント関連ばかりが話題になるが、実際には、界の実務にも徐々に影響が出始めている。法との関連で活発に導入が進んでいる「9000」は文書のデータベース化という一持っているが、最近では、それら様々なデータベースをネットワークで結んで活用する仕である「CALS」が、新聞や雑誌に登場することが多くなった。では、そのCALSと体何なのか……。

でも筑波研究学園都市やロサンゼルスのように、みんなが車に乗っているようなん……あいうタイプの街も別にあっても構わないとは思うんですけど、あれが未来都市かと言わると、到底そうとは思えない。さつきの地下の話じゃないんですけど、たまたま歩いていたらこんなのに出会つたみたいで、歩いていて楽しい街じゃないとおもろくないと私は思うんですね。そういう中で、この場合は

実は、私も最近、あの駐車設備を動かす時の押しボタンを、地面からグニャッと伸びた棒ではなく、すつきりとしたのに変えたばかりなんです。前々から何とかしたいと思っていたんですけど…、なかなか無くて。でも、そういうのをちょっとと変えるだけでもずいぶん違うんですね。また駐車場では、ムでは身障者用トイレの押しボタンも変えました。だって、あのボタンつて今まで全部同じだったんですよ。赤と緑のランプが2個付

いていて、開閉によつて違うボタンを押す仕掛け。でも「何で二つも必要なのか？」と。だつて入るかが出るか、一度に両方は出来るんだから、一つで十分でしょう。でメーカーに尋ねると「はて、何ででしょうね？」と。つまり最初のがたまたまそうだったんで、そのままつときただけなんですよ。メーカーも当初は「つくれない」と、でも結局は「つくれます」と、それで実現しました。そういうとつて、駐車設備などでも結構あるんじゃないでしょうか。

とと「楽しい」という、二つの機能が求められることになります。ならば、それを分けずに解決出来ないものかと。つまり今までのよう手で設計するのではなく、コンピューターのプログラムを使って、それを解けないと。実は現実に今、私はそのプログラムを大学とジョイントで研究している真っ最中なんです。

「誘導都市プロジェクト」といつて、テーマは幾つもあるんですが、たとえばその一つでは、要するにそこでは「どんな道がいい道か」と

二つの条件以外は、あとは全部由。そうすると何が起きるかと
うと、今までのような真つすぐ
道だけでなく、なんだか分かん
いようないろんな道が出来て
て、しかも現実にそれは真つす
な道よりも速く着くし、おもし
いという。そしてもつと言えば
それによつて都市自体の状況も
後は随分変わつてくるかもしれ
いし、またそうした意味からよ
うに、都市はこれからますますおもし
くなら、と云は思ひます。

The image shows the front cover of a Japanese book titled "まるちねっと ISDN 電脳パラダイス". The title is written in large, stylized letters at the top. Below it is a colorful illustration of a red, winged, cartoonish character, possibly a dragon or a knight, holding a sword. The character has a determined expression. The background of the cover features a yellow gradient with some abstract shapes.



A blue circle containing a large orange letter 'P'.

同封の「アンケートはがき」
に必要事項をご記入の上
ふるってご応募ください

同封の「アンケートはがき」
に必要事項をご記入の上
ふるってご応募ください

カルス、キヤルズ、キャルス……。横文字ならCALSで間違いようがないが、カタカナでは実にさまざまな表記が登場する。それもそのはず、このCALS、ネイティブな英語ではなく、4つの単語の頭文字を並べた略称なのである。最近生まれた言葉だから、大抵の辞書には出ておらず、読み方も一定していないのだろう。

日本では「継続した調達とライフサイクル支援」などと堅苦しく表記されるCALSだが、英語ではCommerce At Light Speed（光速商業）。話題のインターネットなどを通じて、電子のスピードで行われる商取引全般を意味する言葉である。

欧米のアイデアを取り入れて適度にリファインするのが得意な日本人としては、ずいぶん思い切った意訳だなと感じられたとしたらいいにこだが、日本語の訳が英語と違うのは、英語の方が、実は「日本語の訳を置



ライバルにオーブンできるわけがない」と短絡的な反発があるのはもちろんだが、どんな書類でもマル秘の判断を押してからでないと人に見せられないどこかの官僚とは異なり、日々闘っている日本のビジネスパー ソンなら、情報共有の価値は、一考 していただければすぐ見えるはず。 情報 자체が価値だった大昔の感覚 で、情報＝独占という図式しか描けないアプロアな頭はお払い箱にして、情報は「肥料」なのだと、発想のコペ ルニクス的転回を行って欲しい。共 有された情報からどんな創造の芽が 生まれるのか——そこが、これから の競争の出発点だろう。

CALSに至るまでの問題點

いささか足早にCALSのコンセ プチュアルな側面を述べたが、こ ういった仕組みを可能にする技術面に も少々触れておこう。

CALSを可能にする技術的な要 素の内、基盤ともなるデジタル・ネ

各々のソフトを局所的に見るとしまい、全体的に見るとが生じている。そのツケに回ってきたのである。一ザーに負担を強いつ換が可能になるのは間違できるだけスマートな移もらいたいものだ。

最適化して
大きな無駄
が今、一氣
いすればユ
、データ互
いないが、
行を図つて

テイクス」である。日本の軍事用語では「補給」とか「後方支援」などと呼ばれる、前線で展開する軍隊に物資を供給する活動全体を意味している。戦争は一面では物流競争だから、まだるっこしい人手のかかる伝票処理など通用しない。コンピュータ支援が必須というわけである。

コンピュータ 자체、米軍の弾道計算の高速化のために実用化されたものだから、その応用が軍事目的から出てきても当然と言えは当然。道具は道具というわけで、カッコ良く言えば、それを平和と協調の道具に変えられるかどうかが、いま問われているのである。

デジタル・ネットワーク社会というと、インターネットのネットサーフィンなどエンターテイメント関連ばかりが話題になるが、実際には、建築界の実務にも徐々に影響が出始めている。PL法との関連で活発に導入が進んでいる「ISO9000」は文書のデータベース化という一面を持っているが、最近では、それら様々なデータベースをネットワークで結んで活用する仕組みである「CALS」が、新聞や雑誌に登場することが多くなった。では、そのCALSとは一体何なのか……。

情報共有がCALSの基盤

「」のCALSによって可能になると言われているのが、バーチャル・カンパニー。従来の会社とは一風違つたビジネス組織である。ネットワーク上で各社のデータベースがオーブンされ、素材・部品・製品・技術・サービス等を目的に応じて自在に検索できるCALSが実現すれば、

き去りにして、変わってしまった」からなのだ。まだ記憶に新しい湾岸戦争で、まるでシヨーのように報じられた米軍の圧倒的軍事力を可能にしたのが、「」のCALSだと言われている。

その頃は、Computer-Aided Logistic Support、アルビン・トフラー教授がクーリ工芸社のコマーシヤルで強調している、あの「ロジス

会社の中に各部門を抱え込まなくて
も、必要な都度、目的やコストなど
にもつともふさわしい相手を探し出
して、テンポラリーに共同すること
ができる（はずである）。そのためには、
ここは繰り返しになるけれど、
各社のデータベースはネット上にオ
ープンされていなければならぬ。
世界中に広がったネットワークの
隅々まで、自分の関心で情報を探す
こと自体、ほとんど不可能と言つて
いい。逆に、自分をその上にオープ
ンすることで、相手に自分を探して
もらうことが可能となる。力王（情
報）がネギを背負つてやってこない
とは限らないのだ。

ソフトワークについては、インターネットの爆発的成功によって具体的な形が見えてきつつある。もちろん、現在の通信インフラでは物理的スピード（帯域幅）が遅いという弱点はある。道路と車の関係のように、渋滞→帯域の拡大→通信の増大→渋滞→帯域の拡大、といったイタチゴーゴーを繰り返しながら「情報スーパーハイウェイ」へと進化していくことのも間違いない。何かと話題になる完全性の問題も、公開鍵暗号システムの実用化で解消され始めている。それに対し、このネットワーク上でやりとりされるはずの情報の方は、混乱の極みである。たまたま情報の受け手と送り手が同じソフトを